

## 松本地区外国人留学生在が認識する方言

上 條 厚

キーワード：方言指導、聞く、共通語、使う

### 要旨

本学外国人留学生の学部1年生と2年生に、松本で聞く方言について、自分の聞くものを回答する方式で調査を行った。回答された中には共通語もあったが、それは回答者が方言と認識しているものと思われる。方言の回答個数は1年生の方が多かった。回答された方言は様々であり、現在松本を中心に使用されているものが回答に反映されている。周囲の日本人は、留学生に向かっても方言を相当使っている。留学生は方言を大分理解している。

### 1. 始めに

日本で学習する外国人留學生は、学習しつつ周りの日本人と接し、日本語を聞いて生活するが、そこで聞く日本語は共通語だけとは限らない。共通語以外にいろいろな方言に接するであろう。かれらは大学等の教職員・学生と接し、そのほかに一般の日本人とも接する。教職員・学生から方言が聞かれることもあるであろうが、一般の日本人からは、それぞれの地域の方言をより多く聞くことが想像される。こうして外国人留學生が長野県で学習しているのであれば、長野県の方言にさらされることになる。外国人に対する日本語教育の中で、方言指導をどの程度にすべきかということは、1つの考えるべき課題である。

長野県で学習する外国人留學生には、長野県の方言の知識をある程度教えておいた方がよいであろう。また長野県といえども広いわけであり、留學生の居住しているそれぞれの地域の方言について、教えるべきであろう。その教育はいかにあるのがよいか、考慮すべきである。ここでは松本のことを中心に述べる。

筆者は上條(1998)において、調査結果に基づいて、松本在住の本学外国人留學生が、相当程度松本方言を聞き、理解していることを示した。今回、本学外国人留學生に対して、方言について別の調査を行った。その結果に基づいて述べる。

#### 1-1. 調査の方法と対象

今回行った調査は、外国人留學生個人個人が松本においてどんな方言を聞くか調べるものであり、方言指導がいかにあるべきかの方向性を探るために行ったものである。次のような要領で行った。——この調査は、調査対象者に用紙を渡して書いてもらう方式で行う。最初に調査者が回答者に対して、松本地方には方言があることを説明し、その後で回答者に、松本および松本周辺でこれまでに聞いた方言を、できるだけ多く思い出させる。回答者は思い出したものを記入する。記入するのは単語だけでもよいし、文の形でよい。次にその方言は回答者に向かって言ったものか、向かって言ったものではないかを答える。その次にそれは

どういう人がどういう所で言ったものか書く。最後に回答者がその方言の意味が分かる場合には、その意味を答える。用紙は2枚渡し、1枚は渡されたその場で書いて提出する。もう1枚は1週間後に提出とし、1週間の間に思い出したもの、また新たに聞いたものについて書いて提出する。——以上のように行った。

この調査により、外国人留学生は松本でどのような方言を聞きそれを認識しているかということ、また外国人留学生に接する周りの日本人はどのような方言を使っているかということ、知ることができる。そしてそれを考察することにより、方言指導を行おうとする場合に留意しなければならない点を、検討することができると思う。

調査の対象としたのは、学部1年生が中心であり、2年生が若干名であった。1年生26名、2年生8名から回答が得られた。なお学部生は皆、日本語で行う大学の講義を受講できる程度に、高度な日本語能力を備えた人たちである。

調査を実施した時期は1999年10月であった。この調査に回答した人たちは全員が、本学入学と同時に松本での生活を始めたものである。(1年生の中に1名、以前松本に旅行に来たことのある者がいるが、短期の旅行であり、居住歴としては無視してよいであろう)したがって調査時期における回答者たちの松本での居住歴は、1年生は半年、2年生は1年半である。

## 2. 方言と認識された共通語

以下にこの調査で回答されたものについて見ていくが、回答されたのは単語段階から語法・表現法に関するものまで、様々である。

回答された中に共通語があった。最初にそのことについて述べる。この調査は、自分が聞く方言を答えるとしたものであるから、回答されたのは、回答者が方言と認識しているものである。つまり共通語形を方言形と認識して回答しているわけである。回答されたのを挙げると次のとおりである。

①お待ち遠様でした ②日本に長い ③うれしいや ④飯を食ったか ⑤のろい ⑥でかい

これらがどうして回答されたのか、考えてみる。

①お待ち遠様でした—— これは共通語として、商店においてはごく一般的に使われるものである。回答者がそれを方言だと思ったのは、その学生(1年生である)がこれまでの日本語学習で、この表現に触れなかったためと考えられる。自分が学習していない言い方だから方言だと考えたと想像される。この回答者が大学入学までに使用した日本語教材にこの表現が出ていないか、あるいは日本語学校での学習項目になかったということであろう。この回答者はこのことばの意味をすぐに理解できたようなので、学習していなかったからといって特に問題はなかったであろうが、このようなよく使われる表現は、学習しておいてしかるべきである。大学の学部生として入学できるほど高度な日本語能力を身に付けた人が、それを未習であるというのは問題ではないだろうか。こうした回答があることから、日本語教材のあり方および日本語学習のあり方を考えさせられる。

②日本に長い ③うれしいや—— これらの言い方も、回答者が初めて聞いたために、方言と認識したと考えられる。ただしこれらは日本語教材には特に載せなくてもよいであろう。これらは日本語教材になくても、日本語に多く接するうちに習熟するものであり、自然に習熟するのにまかせればよい性格のものである。

④飯を食ったか—— 「飯」も「食う」も低俗とされる表現である。そのために方言と考えたのであろう。

⑤のろい ⑥でかい—— これらはれっきとした共通語である。しかし低俗な語と考えられ、あまり使用されない傾向にあるとも言える。普通の日本語教科書には載っていないであろう。そのために方言と認識さ

れたと思われる。

以上、共通語であっても、外国人が方言と認識することがあり、その点興味深い。

### 3. 回答された方言

次に回答された方言について見る。まず回答された個数を集計する。

回答の中には、テレビを見ていて聞いたとするのがあったが、これは調査の趣旨に反するものなので、集計から除外する。回答された中には、1つの語法、例えば否定の「-ネー」などを使用した形を、1人の回答者がいくつか書いているものがあるが、そういうのは1つとして集計する。回答されたものには、松本およびその周辺で聞いたのであっても、いろんな地域の方言がある。回答された方言全ての集計と、長野県内に行われる方言のみの集計を出す。個人個人の回答個数に従って、回答個数ごとの人数を示すと次のとおりである。

【表1】

学 年		1 年 生			2 年 生		
回 答 個 数		9 8 7 6 5 4 3 2 1 0	計	9 8 7 6 5 4 3 2 1 0	計		
人 数	方言全て	1 5 3 3 1 1 1 3 4 3 2	26	1 2 0 0 1 1 1 0 1 2 0	8		
	長野県内	0 1 0 1 3 0 5 7 7 2	26	0 0 0 0 1 1 1 1 1 0 4	8		

1人の回答個数で一番多かったのは、1年生・2年生とも9個である。中には回答数0（全然聞いていない、または思い出さない）という回答者もいる。9個～6個回答した回答者の数を見ると、1年生が12名（46.2%）、2年生が3名（37.5%）である。この結果では1年生の方が2年生より多くなっている。2年生が1年生よりは長く松本ないしは日本にいるわけであるが、回答個数は多くなっていない。上條（1998）における調査では、松本在住の外国人留学生は学年が進むにつれて、つまり松本在住の期間が長くなるにつれて、松本方言の理解度が上がる傾向があるという結果となっているが、そこでの調査方法は調査票に提示された語について答えるものであった。今回の調査は方言を自分で思い出して答えるものである。提示された方言について答える場合と、自分で思い出す場合とでは違いがあるようであり、自分で思い出すときには、在住期間の長短はあまり関係ないという結果である。

次に回答された中から、長野県内に行われる方言のみを取り上げ、それについて検討する。筆者の出生・生育地は、松本市に隣接する東筑摩郡朝日村であり、出生年は1947年であるが、筆者の判断も加えながら述べる。回答された方言を示し、留学生の聞くそれらがどの程度使われるものか考え、必要に応じて、それが聞かれる背景も考える。以下に見るように、外国人留学生は多様な方言を聞いていることが分かる。分類して挙げる。方言形はカタカナ書き、（ ）内は相当する共通語である。

#### 3-1 単語段階のもの

- a. 名詞 ①オツクベ（正座） ②オナ（野沢菜） ③オラホ（わたしたちの方） ④ココイラ（この辺）  
⑤ズク（労力をいとわずにしようとする気持ち・力） ⑥ヘラ（舌） ⑦マエデ（前）

これら回答されたものは外国人留学生が聞いたのであり、周囲の人が使っていることの反映である。ただしこれらの語の使用頻度が同程度であるとは思われない。頻度に高低の差はあるだろう。②オナ ⑤ズク ⑦マエデ は、松本地方で現在よく使われると筆者は判断する。③オラホ ④ココイラ ⑥ヘラ は、比較

的によく使われる方だと判断する。さて、①オツクベ についてであるが、これは使用頻度が相当低く、特に若い人は使わないと筆者は考えていた。ところがこれを聞くという回答があった。書かれた回答を見てみると、これは回答者に向かって言ったものであり、言った人は19歳の女性、言った場所は家の中である。若い人が使っていたのである。女性が家の中で言ったことから見て、実際に正座するときに言ったものかと想像される。どの程度の頻度で使っているかはこの調査では分からないが、現に使っている。筆者自身は最近この語を聞いたことがないため、現在ではほとんど使わないだろうと考えていたが、それは間違いだったのである。

外国人のための方言指導の第一目的は、方言を聞き理解できるようにすることとすべきであろう。そうするための教材を作るには、その地で現在よく使われている語・表現を選ぶことが当然の作業になる。その作業を個人や2、3人の経験だけに基づく判断で行っていたら、実際に使われているものを見落としてしまう危険性がある。ここに見たオツクベの例も、そうしたことを示している。自分の経験だけでもを決めてはならないことを痛感する。教材を作ろうとするときには、使用状況に関して、また外国人がどの程度聞いているかについて、広範囲の調査をすべきである。

②オナ ⑤ズク ⑦マエデ について述べておく。野沢菜は長野県の特産品であり、長野県の人々の生活と結び付いている。そのためこの地の言い方であるオナも幅をきかせていると考えられる。ズクということばは、これに対応する共通語の単語を見つけることは不可能であると筆者は考える。また「ズクがある／がない」のように使い、やる気の有無を表すのに便利なことばである。それで使用が多いと思われる。マエデは共通語と語形が似ている。そのためこれを共通語と認識している人が、教育程度の高い人の中にも相当にいると思われる。公的な場、例えば小中学校の教員の集まり等での発言でも、長野県内ではよくこれが使われている。

**b. 動詞** ⑧トブ (走る) ⑨ピチャル (捨てる)

⑧トブ は、高年齢の人は比較的良好よく使うと筆者は判断する。⑨ピチャル については、筆者の使用語形はブチャルである。(ただし現在ではほとんど使うことがないが) この言い方について、松本生まれで現在も松本在住のA氏(80代女性)・B氏(40代男性)・C氏(40代女性)に確認したところ、A氏の使用語形はブチャル、B氏とC氏の使用語形はピチャルであった。松本の中年の世代ではピチャルがよく使われているということであろうか。それが回答に反映していると思われるべきである。<sup>(注1)</sup>

**c. 形容詞** ⑩エレー・エライ (疲れた) ⑪ゴシタイ (疲れた) ⑫シンドイ (疲れた)

⑬テキネー (疲れた) ⑭ツモイ (入れる所が小さくて、入りにくい状態)

⑮ミグサイ (みっともない)

⑩に語形を2つ書いてあるのは、2つの形が回答されているということである。最初に「疲れた」という意味の4語について見る。⑪ゴシタイ ⑬テキネー はよく使われると判断する。⑫シンドイ はおそらく松本にも使う人がいると考えるが、これは関西方面で有力なことばである。⑩エレー・エライ は、「疲れた」の意味で使うのを筆者は松本で聞いたことがないが、B氏・C氏に確認したところ、時々聞くということである。こうした使用状況が回答に反映されているわけである。<sup>(注2)</sup>

次に⑮ミグサイ については、よく使われると判断する。⑭ツモイは、比較的良好よく使われる方だと判断する。

**d. 副詞** ⑯へー (もう・すでに)

**e. 接続詞** ⑰ホイデ (それで)

f. その他 ⑱ハールカブリ (久しぶり) ⑲ダイジョー (大丈夫)

⑱～⑲の語は、現在でも比較的良好に使われる方だと判断する。

3-2 音韻にかかわるもの [ ] 内は例

- ①アイ → エー [ネー (ない)]
- ②オイ → エー [スゲー (すごい)]
- ③アエ → エー [ケール (帰る)]
- ④ウイ → イー [ワリー (悪い)]

これらは長野県の方言だけのことでなく、いろんな地方で相当広く行われている。外国人留学生が耳にすることも多いであろう。

3-3 語法にかかわるもの [ ] 内は例

- ①否定 -ネー [シラネー (知らない)]
- ②否定 -ン [ワカラン (分からない)]
- ③相手に対する確認 -ジャン [イージャン (いいじゃないか)]
- ④推量 -ズラ [ソーズラ (そうだろう)]
- ⑤推量 -ラ [イーラ (いいだろう)]
- ⑥確認 -ダ [マツモトダダ (松本であるのだ)]
- ⑦勧誘 -e'ja/-ro'ja [ケーレヤ (帰ろう)]
- ⑧優しい命令 -i [タベリ (食べなよ)]
- ⑨優しい勧誘 -i'ja [イキヤ (行こうよ)]
- ⑩自問的質問 -カヤ [ナルカヤ (なるかなあ)]
- ⑪優しい質問 -カイ [タベルカイ (食べるかね)]
- ⑫強い断定 -サヤ [イーサヤ (いいよ)]
- ⑬丁寧な断定 -ジ [ソーダジ (そうですよ)]
- ⑭丁寧な断定 -イネ [ソーダイネ (そうですよ)]
- ⑮意志・推量・勧誘 -ズ [イカズ (行こう)、ドーンズカ (どうしようか)]

これらの内、①否定 -ネー ②否定 -ン ③相手に対する確認 -ジャン は、長野県内のみならず、相当広い地域で行われている。留学生が長野県で耳にすることも多いであろう。牛山 (1969) によると、東西方言での否定のナイとンの対立は松本の南西を境界線が走っていて、松本はナイの地域となっている。ただし現在の松本では、ンも多く行われている。

④推量 -ズラ ⑤推量 -ラ ⑥確認 -ダ ⑦勧誘 -e'ja/-ro'ja (ケーレヤ等) ⑧優しい命令 -i (タベリ等) ⑨優しい勧誘 -i'ja (イキヤ等) は、松本地方で現在よく使われると筆者は判断する。④～⑦は筆者も現在使っている。⑧と⑨については、筆者自身にとっては以前も現在も使用語彙でない。ただしこれは、筆者の行った調査 (未発表) によると、筆者の出生地を含めた広範の地域で現在使われている。これらのものは、松本にいれば聞くことの多いものと考えられる。

⑩自問的質問 -カヤ ⑪優しい質問 -カイ ⑫強い断定 -サヤ ⑬丁寧な断定 -ジ ⑭丁寧な断定 -イネ は、比較的良好に使われる方だと判断する。-カヤ・-カイは他の地方にも似た形があるが、松本で行われるものは優しさを含んだ表現である。-ジ・-イネはどちらも丁寧な断定であるが、-

イネの方はあらたまった場面での言い方である。

⑮意志・推量・勧誘 - ズ は、現在ではめったに使われないと判断する。書かれた回答を見てみると、これは回答者に向かって言ったものではなく、また言った人は95歳の女性である。中年以下の人の会話では、現在ほとんど使われないように思う。

### 3-4 表現にかかわるもの

①イタダキマシタ (ごちそうさまでした)

②ワリーナ (悪いですね・ありがとう)

これらは現在よく使われると筆者は判断する。イタダキマシタが使われるのは松本・長野県だけではない。他の地方でも聞かれる。語法としては共通語と変わらないが、共通語とは考えられない用法である。

以上、回答された方言について見たが、相当多くの方言を外国人留学生が聞き、それを認識していることが分かる。またそれはそれだけ多く、周囲の日本人が方言を使っているということである。

## 4. 使用の様態・理解度

調査では、回答した方言が回答者に向かって言ったものか、向かって言ったものではないかを聞いている。長野県内に行われる方言のみについてそれを集計する。【表1】により、長野県内に行われる方言の回答回数合計は76であるが、向かって言ったかどうか記入のないのが2つあるので、記入のあるのは74である。その集計をすると次のとおりである。

回答者に向かっていったもの	44
回答者に向かっていったのではないもの	30

回答者に向かって言ったのが半数以上であり、相手が外国人であると分かっているにもかかわらず方言を使うことが、これから分かる。

調査では、回答した方言の意味が分かる場合には、その意味を答えることになっている。長野県内に行われる方言76について見ると、意味を答えているのは65である。その正解・不正解は次のとおりである。

意味の回答数	正解	不正解
65	57	8

意味の回答数 (65) に対する正答率 87.7%

聞く方言全体 (76) に対する正答率 75.0%

これを見ると、相当の高率で正しく理解していることが分かる。自分が聞き、認識している方言は、大分よく理解しているのである。

## 5. 終わりに

今回行った方言に関する調査により、外国人留学生は共通語をも方言と認識している場合があることが分かった。回答された方言について見ると、まず回答された個数の点では、学部1年生と2年生を比較すると、

1年生の方がむしろ多いことが分かった。回答された方言は様々であり、中にはよく使われると思われるものから、現在ではほとんど使われないと思われるものまである。また筆者が現在ではほとんど使われないと考えていたものを、若い人が使っているという例もあった。周囲の日本人は外国人留学生に向かって方言を大分使っている。また外国人留学生は方言を相当よく理解している。

外国人留学生が日本での生活をしていくためには、方言をある程度理解することが必要である。より効果的な方言指導を考えていくべきである。

### 【注】

- 1) 『信州方言辞典』(足立(1978)。昔からの聞き書きや書物によりまとめたもの)によって、ピチャル・ブチャルおよび「捨てる」の意味の関連ある語を見ると、ピチャルが信州全域と隣接する新潟県と愛知県、ブチャルが東信・東筑摩(旧東筑摩郡)・伊那(旧上下伊那郡)、ベチャルが高水(旧上下高井郡および旧上下水内郡)・更埴(旧更級郡および旧埴科郡)と越後となっている。『現代日本語方言大辞典』(平山他(1992~94)。調査時 1974~82)では、長野(調査地点 長野市)はベチャルとなっており、ブチャルとなっているのは群馬、ピチャルは新潟・佐渡である。現在の松本の中年層ではピチャルが優勢であることが想像されるが、詳しい状況は調査をしてみなければ何とも言えない。
- 2) 『長野県史 方言編』(馬瀬(1992))は「長野県言語地図」を、424地点での調査(調査時 1974~78。その後に補充調査もあり)によりまとめているが、それによって見ると「疲れた」の意味でのエレー・エライの使用は、木曾郡の中部以南で7地点、旧下伊那郡で所々まばらに8地点とそれに隣接する上伊那郡で1地点となっている。このような状況であるが、現在ではこの言い方が松本まで進出してきているということであろうか。次にシンドイについて同書で見ると、長野市とその南でまばらに5地点となっている。関西で有力なことばであるが、同書の調査時に、長野県でも使われているのである。

### 【引用文献】

- 上條 厚 1998 「松本地区外国人留学生への方言指導を目指して」  
『信州大学教育システム研究開発センター紀要』第4号
- 平山輝男他 1992~94 『現代日本語方言大辞典』(全9巻)
- 馬瀬 良雄 1992 『長野県史 方言編』
- 足立 惣蔵 1978 『信州方言辞典』
- 牛山 初男 1969 『東西方言の境界』

### 【参考文献】

- 前田 昭彦 1999 「長崎方言におけるタイとバイの意味論的差違」『長崎大学留学生センター紀要』第7号
- 真田 信治 1992 「方言の状況と日本語教育」『日本語教育』76号
- 田尻 英三 1992 「日本語教師と方言」『日本語教育』76号
- 細川 英雄 1992 「日本語教育と方言意識 — 金沢市内日本語教育機関での調査から —」  
『日本語教育』76号
- 渋谷 勝己 1992 「社会言語学的に見た日本語学習者の方言能力」『日本語教育』76号
- ダニエル・ロング 1992 「日本語教育における「方言教育」の問題点」『日本語教育』76号
- エカ マレティヤニンシ 1992 「日本語教育における地域語教育のあり方に関する調査」  
『日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集』広島大学留学生センター